

集合の濃度と選択公理

alg-d

<http://alg-d.com/math/ac/>

2012年2月26日

$|X|$ で X の基数 (濃度) を表す .

定義. X と Y を集合とする .

1. $|X| \leq |Y| \iff$ 単射 $X \rightarrow Y$ が存在する
2. $|X| = |Y| \iff$ 全単射 $X \rightarrow Y$ が存在する
3. $|X| < |Y| \iff |X| \leq |Y|$ かつ $|X| \neq |Y|$
4. $|X| \leq^* |Y| \iff$ 全射 $Y \rightarrow X$ が存在するか, $X = \emptyset$
5. $|X| <^* |Y| \iff |X| \leq^* |Y|$ かつ $|X| \neq |Y|$

- 命題. 1. $|X| \leq |Y|$ かつ $|Y| \leq |X|$ ならば $|X| = |Y|$ (Bernstein の定理)
2. $|X| < |\mathcal{P}(X)|$ (Cantor の定理)
 3. $|X| \leq |Y|$ ならば $|X| \leq^* |Y|$
 4. 選択公理を仮定するとき, $|X| \leq^* |Y|$ ならば $|X| \leq |Y|$

定義. 整列された無限集合 X を使って $|X|$ と表される基数をアレフと言い, \aleph で表す .
特に, 自然数全体がなす整列集合で表されるアレフを \aleph_0 と書く .

命題. X を集合とする . $\aleph \not\leq |X|$ となるような最小の \aleph が存在する .
(勿論選択公理は仮定しない . このような \aleph を X の Hartogs number と言う .)

証明. $\alpha := \{\beta : \text{順序数} \mid |\beta| \leq |X|\}$ と置く . α は集合である .

∴) $W := \{R \subset X \times X \mid R \text{ は } X \text{ のある部分集合を整列する}\}$ と定義する . W は集合である . よって「 W に現れる整列順序と同型な順序数全体」も集合である . この集合は α と一致する .

順序数の推移的な集合は順序数だから, α も順序数である. $\alpha \notin \alpha$ だから $|\alpha| \not\leq |X|$.
よって, α の定義から $\aleph := |\alpha|$ は Hartogs number である. \square

定理 1. 次の命題は (ZF 上) 同値

1. 選択公理
2. 任意の X, Y について, $|X| \leq |Y|$ または $|Y| \leq |X|$
3. 任意の X, Y について, $|X| \leq^* |Y|$ または $|Y| \leq^* |X|$

証明. (1 \implies 2) X と Y を任意の集合とする. 選択公理と同値な整列可能定理により, この2つを整列する. すると整列順序の性質から $|X| \leq |Y|$ または $|Y| \leq |X|$ が分かる.

(2 \implies 3) は明らか.

(3 \implies 1) まず $|Y| \leq^* |X| \implies |Y| \leq |\mathcal{P}(X)|$ であることに注意する.

\therefore) $f: X \rightarrow Y$ を全射だとすると $Y \ni b \mapsto f^{-1}(b) \in \mathcal{P}(X)$ は単射である.

整列可能定理を示す. X を集合とする. \aleph を X の Hartogs number とすると $\aleph \not\leq |\mathcal{P}(X)|$. よって先の注意より $\aleph \leq^* |X|$ である. 従って仮定 3 から $|X| \leq^* \aleph$ となる. $\aleph = |\alpha|$ となる順序数 α と全射 $f: \alpha \rightarrow X$ を取る. すると $g(a) := \min f^{-1}(a)$ として単射 $g: X \rightarrow \alpha$ が得られる. よって X は整列可能である. \square

定義. κ と λ を基数とする. $\kappa = |X|$, $\lambda = |Y|$, $X \cap Y = \emptyset$ となるような X, Y を取る.

1. $\kappa + \lambda := |X \sqcup Y|$
2. $\kappa \cdot \lambda := |X \times Y|$
3. $\kappa^\lambda := |X^Y|$ ($X^Y := \{f: Y \rightarrow X\}$)
4. $\kappa = \lambda + \mu$ となる基数 μ が唯一つ存在するとき, $\kappa - \lambda := \mu$
5. $\kappa = \lambda \cdot \mu$ となる基数 μ が唯一つ存在するとき, $\kappa \div \lambda := \mu$

n が有限基数のとき, κ の n 個の積と κ^n は一致する.

補題 2. 任意の基数 κ, λ について

$\kappa \leq \lambda \iff$ ある基数 μ が存在して $\kappa + \mu = \lambda$

補題 3. 任意の \aleph に対し $\aleph^2 = \aleph$.

証明. 無限順序数 α に対し $|\alpha \times \alpha| = |\alpha|$ を示せばよい.

(i) $\alpha = \omega$ のときは明らか .

(ii) $\alpha = \beta + 1$ のとき , 明らかに $|\alpha| = |\beta|$ なので $|\alpha| = |\beta| = |\beta \times \beta| = |\alpha \times \alpha|$.

(iii) α が極限順序数のとき .

ある $\beta < \alpha$ に対し $|\beta| = |\alpha|$ となるときは (ii) と同様 $|\alpha| = |\alpha \times \alpha|$ となる . なので全ての $\beta < \alpha$ に対し $|\beta| < |\alpha|$ であるとする .

$\alpha \times \alpha = \bigcup_{\beta < \alpha} \beta \times \beta$ である . $\alpha \times \alpha$ に順序 R を

$$\langle \beta_1, \beta_2 \rangle R \langle \gamma_1, \gamma_2 \rangle \iff \begin{cases} \max\{\beta_1, \beta_2\} < \max\{\gamma_1, \gamma_2\} \\ \text{または } \max\{\beta_1, \beta_2\} = \max\{\gamma_1, \gamma_2\}, \beta_1 < \gamma_1 \\ \text{または } \max\{\beta_1, \beta_2\} = \max\{\gamma_1, \gamma_2\}, \beta_1 = \gamma_1, \beta_2 < \gamma_2 \end{cases}$$

と定める . この R は整列順序である . また , $\beta < \alpha$ に対し $\beta \times \beta \subset \alpha \times \alpha$ は initial R -section となる .

順序数 $\psi(\beta)$ を $\psi(\beta) \cong (\beta \times \beta, R)$ で定める . $\beta < \alpha$ のとき

$$|\psi(\beta)| = |\beta \times \beta| = \begin{cases} \text{有限基数} \\ |\beta| \end{cases} < |\alpha|$$

故に $\psi(\beta) < \alpha$ である . よって

$$\alpha \times \alpha = \bigcup_{\beta < \alpha} \beta \times \beta \cong \bigcup_{\beta < \alpha} \psi(\beta) \leq \alpha$$

従って $|\alpha \times \alpha| \leq |\alpha|$ である . □

補題 4. 基数 $\kappa, \lambda \geq 2$ に対し $\kappa + \lambda \leq \kappa \cdot \lambda$

証明. $\kappa = |X|$, $\lambda = |Y|$, $X \cap Y = \emptyset$ となる集合を取る . $a \neq b$ となる $a, b \in X$, $s \neq t$ となる $s, t \in Y$ を取る . $\varphi: X \sqcup Y \rightarrow X \times Y$ を

$$\varphi(x) := \begin{cases} \langle x, s \rangle & (x \in X \text{ のとき}) \\ \langle a, x \rangle & (x \in Y \setminus \{s\} \text{ のとき}) \\ \langle b, t \rangle & (x = s \text{ のとき}) \end{cases}$$

と定めれば φ は単射である . □

補題 5. 基数 κ, λ, μ とアレフ \aleph が $\kappa \cdot \aleph \leq \lambda + \mu$ を満たす時 , $\kappa \leq \mu$ または $\aleph \leq \lambda$.

証明. $\kappa = |X|$, $\lambda = |Y|$, $\mu = |Z|$ となる集合 X, Y, Z と $\aleph = |W|$ となる整列順序集合 W を取る . $Y \cap Z = \emptyset$ としてよい . 仮定より単射 $f: X \times W \rightarrow Y \sqcup Z$ が存在する .

$\bar{Y} := f^{-1}(Y)$, $\bar{Z} := f^{-1}(Z)$ とすれば $|\bar{Y}| = |Y| = \lambda$, $|\bar{Z}| = |Z| = \mu$, $X \times W = \bar{Y} \sqcup \bar{Z}$ である.

(i) $\{x\} \times W \subset \bar{Y}$ となる $x \in X$ が存在するとき.

$\aleph = |W| = |\{x\} \times W| \leq |\bar{Y}| = \lambda$ である.

(ii) どの $x \in X$ についても $\{x\} \times W \not\subset \bar{Y}$ となるとき.

$w_x := \min\{w \in W \mid \langle x, w \rangle \in \bar{Z}\}$ と書けば

$$\kappa = |X| = |\{\langle x, w_x \rangle \mid x \in X\}| \leq |\bar{Z}| = \mu.$$

□

補題 6. 基数 κ, λ とアレフ \aleph が $\aleph \leq \kappa \cdot \lambda$ を満たす時, $\aleph \leq \kappa$ または $\aleph \leq \lambda$.

証明. $\kappa = |X|$, $\lambda = |Y|$ となる集合 X, Y と $\aleph = |W|$ となる整列順序集合 W を取る. 単射 $f: W \rightarrow X \times Y$ が存在する. π_X, π_Y をそれぞれ $X \times Y$ から X, Y への射影として $U := \pi_X \circ f(W) \subset X$, $V := \pi_Y \circ f(W) \subset Y$ と置く. W の整列順序を使って, U, V は整列可能である. また $f(W) \subset U \times V$ である. このとき補題 3 を使って $\aleph = |W| \leq |U \times V| = |U| \times |V| = \max\{|U|, |V|\}$. 故に $\aleph \leq |U|$ または $\aleph \leq |V|$ であるが, それぞれ $\aleph \leq \kappa$, $\aleph \leq \lambda$ を導く. □

補題 7. 任意のアレフ \aleph, \aleph' に対し $\aleph \cdot \aleph' = \aleph + \aleph' = \max\{\aleph, \aleph'\}$.

証明. $\aleph' \leq \aleph$ だとすると

$$\begin{aligned} \aleph &\leq \aleph + \aleph' \\ &\leq \aleph \cdot \aleph' \quad (\text{補題 4 による}) \\ &\leq \aleph \cdot \aleph \\ &= \aleph \quad (\text{補題 3 による}) \\ &= \max\{\aleph, \aleph'\} \end{aligned}$$

□

定理 8. 次の命題は (ZF 上) 同値

1. 選択公理
2. 任意の無限基数 κ について, $\kappa^2 = \kappa$
3. 任意の無限基数 κ, λ について, $\kappa + \lambda = \kappa \cdot \lambda$
4. $\kappa + \lambda = \kappa$ または $\kappa + \lambda = \lambda$

5. $\kappa \cdot \lambda = \kappa$ または $\kappa \cdot \lambda = \lambda$

証明. (1 \implies 2) 整列可能定理により, 全ての無限基数は \aleph なので補題 3 より明らか.

$$(2 \implies 3) \kappa + \lambda = (\kappa + \lambda)^2 = \kappa^2 + 2 \cdot \kappa \cdot \lambda + \lambda^2 \geq \kappa \cdot \lambda \geq \kappa + \lambda$$

(3 \implies 1) 整列可能定理を示す. X を集合として $\kappa := |X|$ と置く. \aleph を X の Hartogs number とする. 仮定 3 より $\kappa + \aleph = \kappa \cdot \aleph$ となる. Hartogs number の定義より $\aleph \not\leq \kappa$ だから, 補題 5 より $\kappa \leq \aleph$ となる. 故に X は整列可能である.

(1 \implies 4) 整列可能定理により, 全ての無限基数は \aleph なので補題 7 より明らか.

(4 \implies 1) $\kappa + \lambda = \kappa$ のとき明らかに $\lambda \leq \kappa$. 同様に $\kappa + \lambda = \lambda$ から $\kappa \leq \lambda$ が従う. 故に, 選択公理と同値な定理 1 の 2 が成立することが分かる.

(1 \iff 5) は (1 \iff 4) と同様. □

定理 9. $\mathcal{P}_{\text{fin}}(X) := \{Y \subset X \mid Y \text{ は有限集合}\}$ と置く.

選択公理 \iff 無限集合 X に対し $|X| = |\mathcal{P}_{\text{fin}}(X)|$

証明. (\implies) $f : \bigsqcup_{n=0}^{\infty} X^n \longrightarrow \mathcal{P}_{\text{fin}}(X)$ を $f(\langle a_1, \dots, a_n \rangle) := \{a_1, \dots, a_n\}$ で定める. これは明らかに全射なので $|\mathcal{P}_{\text{fin}}(X)| \leq^* |\bigsqcup_{n=0}^{\infty} X^n|$. よって選択公理より $|\mathcal{P}_{\text{fin}}(X)| \leq |\bigsqcup_{n=0}^{\infty} X^n|$. 故に選択公理に気をつけると

$$|X| \leq |\mathcal{P}_{\text{fin}}(X)| \leq \left| \bigsqcup_{n=0}^{\infty} X^n \right| = \left| \bigsqcup_{n=0}^{\infty} X \right| = |X \times \omega| = |X|.$$

(\impliedby) 定理 8 の条件 2 を示す. X を集合とするととき $X \times X = \{\langle a, b \rangle \mid a, b \in X\}$ で, $\langle a, b \rangle = \{\{a\}, \{a, b\}\}$ が順序対の定義だったから $X \times X \subset \mathcal{P}_{\text{fin}}(\mathcal{P}_{\text{fin}}(X))$. 故に

$$|X| \leq |X \times X| \leq |\mathcal{P}_{\text{fin}}(\mathcal{P}_{\text{fin}}(X))| = |\mathcal{P}_{\text{fin}}(X)| = |X|.$$

□

定理 10. 選択公理 $\iff |X| < |X \cup Y|$ かつ $|Y| < |X \cup Y|$ ならば $X \cup Y$ は有限集合

証明. (\implies) 定理 8 の 4 より明らか.

(\impliedby) 濃度の比較可能性 (定理 1 の条件 2) を示す. X, Y を任意の無限集合とする. 勿論 $X \cup Y$ は無限集合になるから, 仮定より $|X| = |X \cup Y|$ または $|Y| = |X \cup Y|$ でなければならない. このとき $|X| = |X \cup Y|$ ならば $|Y| \leq |X \cup Y| = |X|$, $|Y| = |X \cup Y|$ ならば $|X| \leq |X \cup Y| = |Y|$ である. □

定理 11. 選択公理

\iff 「 X が有限集合 $\iff (X, \leq)$ が整列順序ならば (X, \geq) も整列順序」

証明. (\implies) 「 X が有限集合 $\implies (X, \leq)$ が整列順序ならば (X, \geq) も整列順序」は明らか. 逆を示すため, X が「 (X, \leq) が整列順序ならば (X, \geq) も整列順序」を満たすとする. 整列可能定理より整列順序 (X, \leq) が存在する. $(X, \leq) \cong \alpha$ となる順序数 (α, \leq) が存在する. (X, \geq) の整列性より (α, \geq) も整列順序. よって明らかに $\alpha < \omega$, 即ち X は有限集合.

(\impliedby) 整列できない無限集合 X が存在すると仮定する. この X は明らかに「 (X, \leq) が整列順序ならば (X, \geq) も整列順序」を満たす. よって仮定に矛盾. 故に任意の集合は整列可能である. \square

定理 12. $\kappa, \lambda, \mu, \nu$ は無限基数を表すとする. 次の命題は (ZF 上) 同値

1. 選択公理
2. 任意の κ に対しある λ が存在して $\kappa = \lambda^2$
3. $\kappa^2 = \lambda^2$ ならば $\kappa = \lambda$
4. $\kappa < \lambda$ かつ $\mu < \nu$ ならば $\kappa + \mu < \lambda + \nu$
5. $\kappa < \lambda$ かつ $\mu < \nu$ ならば $\kappa \cdot \mu < \lambda \cdot \nu$
6. $\kappa + \mu < \lambda + \mu$ ならば $\kappa < \lambda$
7. $\kappa \cdot \mu < \lambda \cdot \mu$ ならば $\kappa < \lambda$
8. $\kappa < \lambda$ ならば $\lambda - \kappa$ が存在する
9. $\kappa < \lambda$ ならば $\lambda - \kappa = \lambda$
10. $\kappa < \lambda$ ならば $\lambda = \kappa \cdot \mu$ となる μ が存在する
11. $\kappa < \lambda$ ならば $\lambda \div \kappa$ が存在する
12. $\kappa < \lambda$ ならば $\lambda \div \kappa = \lambda$
13. $\kappa + \mu = \kappa + \nu$ ならば $\mu = \nu$ または $\mu, \nu < \kappa$
14. $\kappa + \kappa < \kappa + \lambda$ ならば $\kappa < \lambda$
15. $\mu < \kappa$ かつ $\nu < \kappa$ ならば $\mu + \nu \neq \kappa$
16. $\mu < \kappa$ かつ $\nu < \kappa$ ならば $\mu \cdot \nu \neq \kappa$
17. $\mu^\kappa < \mu^\lambda$ かつ $\mu \neq 0$ ならば $\kappa < \lambda$

証明. (1 \implies その他) 整列可能定理により, 全ての無限基数は \aleph である. よって補題 7 より 2-16 が従う. 17 は定理 1 から分かる.

後は逆を示せばよいので, 各条件の下で選択公理と同値な整列可能定理を示す. その為には, X を任意の無限集合, $\kappa := |X|$ として $\kappa \leq \aleph$ となる \aleph の存在を示せばよい. 特に明記しない限り, \aleph は X の Hartogs number とする. ($\aleph \not\leq \kappa$ に注意しておく.)

(2 \implies 1) 仮定 2 より, $\kappa + \aleph = \lambda^2$ となる λ が存在する. $\aleph \leq \kappa + \aleph = \lambda^2$ である. よって補題 6 より $\aleph \leq \lambda$ となる. 従って補題 2 により $\lambda = \aleph + \mu$ となる μ が取れる. このとき

$$\kappa + \aleph = \lambda^2 = (\aleph + \mu)^2 = \aleph^2 + 2 \cdot \aleph \cdot \mu + \mu^2 \geq \aleph \cdot \mu.$$

よって補題 5 から $\aleph \leq \kappa$ または $\mu \leq \aleph$ が分かる. $\aleph \not\leq \kappa$ なので $\mu \leq \aleph$, 従って $\lambda = \aleph + \mu \leq \aleph + \aleph = \aleph$. 故に $\lambda = \aleph$ である. よって $\kappa \leq \kappa + \aleph = \lambda^2 = \aleph^2 = \aleph$.

(3 \implies 1) $\lambda := \kappa^{\aleph_0}$ と置くと $\kappa \leq \lambda$ かつ $\lambda^2 = \kappa^{2 \cdot \aleph_0} = \kappa^{\aleph_0} = \lambda$. 故に $\lambda = |Y|$ として \aleph を Y の Hartogs number とすれば $(\lambda + \aleph)^2 = \lambda^2 + 2 \cdot \lambda \cdot \aleph + \aleph^2 \geq \lambda \cdot \aleph$. また

$$\begin{aligned} (\lambda + \aleph)^2 &= \lambda^2 + 2 \cdot \lambda \cdot \aleph + \aleph^2 \\ &= \lambda + 2 \cdot \lambda \cdot \aleph + \aleph \\ &\leq \lambda \cdot \aleph + 2 \cdot \lambda \cdot \aleph \quad (\text{補題 4 より}) \\ &= \lambda \cdot 3 \cdot \aleph \\ &= \lambda \cdot \aleph \end{aligned}$$

だから, $(\lambda + \aleph)^2 = \lambda \cdot \aleph$ となる. よって $(\lambda + \aleph)^2 = \lambda \cdot \aleph = \lambda^2 \cdot \aleph^2 = (\lambda \cdot \aleph)^2$ が成立. 従って仮定 3 より $\lambda + \aleph = \lambda \cdot \aleph$ が分かる. 補題 5 から $\aleph \leq \lambda$ または $\lambda \leq \aleph$ となる, $\aleph \not\leq \lambda$ だから $\kappa \leq \lambda \leq \aleph$.

(4 \implies 1) $\lambda := \aleph_0 \cdot \kappa$ と置くと $\kappa \leq \lambda$ かつ $2 \cdot \lambda = 2 \cdot \aleph_0 \cdot \kappa = \aleph_0 \cdot \kappa = \lambda$ である. $\lambda = |Y|$ として \aleph を Y の Hartogs number とする. $\lambda < \lambda + \aleph$ かつ $\aleph < \lambda + \aleph$ と仮定すると仮定 (4) より $\lambda + \aleph < (\lambda + \aleph) + (\lambda + \aleph) = 2 \cdot \lambda + 2 \cdot \aleph = \lambda + \aleph$ となって矛盾する. 故に $\lambda = \lambda + \aleph$ または $\aleph = \lambda + \aleph$ である. $\aleph \not\leq \lambda$ なので $\aleph = \lambda + \aleph$ でなければならない. 即ち $\kappa \leq \lambda \leq \aleph$.

(5 \implies 1) は (4 \implies 1) と同様.

(6 \implies 1) $\kappa \not\leq \aleph$ と仮定する. $\aleph < \kappa + \aleph$ である. 故に $\aleph + \aleph = \aleph < \kappa + \aleph$ だから仮定 6 より $\aleph < \kappa$, よって矛盾.

(7 \implies 1) は (6 \implies 1) と同様.

(8 \implies 1) $\aleph \leq \kappa + \aleph$ である. $\aleph < \kappa + \aleph$ と仮定する. 仮定 8 より $\kappa + \aleph = \aleph + \mu$ となる μ が唯一つ存在する. $\mu = \kappa$ も $\mu = \kappa + \aleph$ もこの式を満たすから, 一意性より $\kappa = \kappa + \aleph$. 従って $\aleph \leq \kappa$ となり矛盾. 故に $\aleph = \kappa + \aleph$ であるので $\kappa \leq \aleph$.

(9 \implies 1) を示すには (9 \implies 8) を示せばよいが, それは明らか.

(10 \implies 1) $\aleph \leq \kappa + \aleph$ だから, 仮定 (8) より $\kappa + \aleph = \aleph \cdot \mu$ となる μ が存在する. 従って $\mu \cdot \aleph \leq \kappa + \aleph$ なので補題 5 より $\aleph \leq \kappa$ または $\mu \leq \aleph$. \aleph は X の Hartogs number だったから $\aleph \not\leq |X| = \kappa$, 即ち $\mu \leq \aleph$ である. よって補題 7 より $\kappa + \aleph = \aleph \cdot \mu = \aleph$ とな

る．故に $\kappa \leq \aleph$ ．

(11 \implies 1) を示すには (11 \implies 10) を示せばよいが，それは明らか．

(12 \implies 1) を示すには (12 \implies 11) を示せばよいが，それは明らか．

(13 \implies 1) $\aleph + \kappa = \aleph + (\kappa + \aleph)$ だから仮定 13 より $\kappa = \kappa + \aleph$ または $\kappa, \kappa + \aleph < \aleph$ である． $\aleph \not\leq \kappa$ だから $\kappa, \kappa + \aleph < \aleph$ となる．従って $\kappa \leq \aleph$ ．

(14 \implies 1) $\aleph + \aleph = \aleph \leq \aleph + \kappa$ である． $\aleph + \aleph < \aleph + \kappa$ だとすると仮定 14 から $\aleph < \kappa$ となり矛盾するので $\aleph = \aleph + \kappa$ ．故に $\kappa \leq \aleph$ である．

(15 \implies 1) を示すには (15 \implies 9) を示せば良い． $\kappa < \lambda$ とする．補題 2 より $\lambda = \kappa + \mu$ となる μ が存在する．仮定 15 より $\lambda = \mu$ となる，即ち μ は一意に決まる．よって $\lambda - \kappa = \lambda$ である．

(16 \implies 1) $\kappa \leq \kappa \cdot \aleph$, $\aleph \leq \kappa \cdot \aleph$ なので，仮定 16 より $\kappa = \kappa \cdot \aleph$ または $\aleph = \kappa \cdot \aleph$ である． $\aleph \not\leq \kappa$ だったから $\aleph = \kappa \cdot \aleph$ ，従って $\kappa \leq \aleph$ となる．

(17 \implies 1) $\mu := 2^{\aleph^{\aleph_0}}$ と置く． $\mu = |Y|$ として \aleph を Y の Hartogs number とする． $\mu^\kappa = (2^{\aleph^{\aleph_0}})^\kappa = 2^{\aleph^{\aleph_0+1}} = 2^{\aleph^{\aleph_0}} = \mu \leq \mu^\aleph$ ． $\mu^\kappa = \mu^\aleph$ だとすると $\aleph \leq \mu^\aleph = \mu^\kappa = \mu$ となり矛盾するから， $\mu^\kappa < \mu^\aleph$ である．故に仮定 17 より $\kappa < \aleph$ ． \square

参考文献

- [1] Horst Herrlich, Axiom of Choice , Springer, 2006
- [2] H. Rubin and J. Rubin, Equivalents of the axiom of choice, North Holland, 1963.